

TPP環太平洋経済連携協定

Trans-Pacific Partnership

環太平洋経済連携協定(TPP)への参加は、日本にとって得なのか、損なのか――。

ジャーナリストの池上彰さんは自由貿易の歴史を振り返ると一つのヒントが見えてくると言う。日本経済新聞

とても難しい話だったり、どう考えて良いのかわからなかったりする場合は、私は歴史を振り返って考えるようにしています。

TPPはそもそも自由貿易の中で出てきた話。自由貿易とはいったいどのようなものなのでしょうか。それについて考えてみると、ガット(関税貿易一般協定)の議論に行き着きます。

ガットは「2度と世界大戦が起こらないように」という願いから始まりました。

第2次世界大戦後、「保護主義を進めると、世界経済が縮小する。その結果、みんなが貧しくなり、再び戦争が起きてしまう。みんなが豊かになれば、戦争が起きにくくなるのではないか」という思いが広がりました。自由貿易によって各国が豊かになれば、戦争が起きにくくなる。こうした状況をつくり出すためにはどうしたら良いのでしょうか。そうした観点からTPPを見ると、また違う見方ができます。

11月の東アジアサミットでは野田首相(左)、オバマ米大統領(中央)、温家宝中国首相が顔を合わせた＝ロイター



■安保としての自由貿易

安全保障の問題として戦略的に考える必要があると思います。

経済的に深く結び付いている国と国は、戦争するとお互いにとってマイナスなので、危機になると双方からストップをかける動きが起きます。そうした関係をつくっていく必要があるのではないのでしょうか。

日本の場合、中国とどう向き合っていけば良いのか。日本と中国は経済的に切っても切れない関係になっています。それをさらに深い関係にするにはどうしたら良いのか。戦略的に考えながら、貿易を考えなければいけない。その時、TPPをうまく使うやり方があるのではないのでしょうか。

■したたかな米国

「日本は戦略性をもって貿易を考えるべきだ」と語る池上彰さん

TPPはもともと太平洋の南側に位置する小さな国々から始まりました。

米国は「これから東南アジアの国々がどんどん入ってくるだろう。マーケットが広がっていくだろう」と見越し、TPPの協議に入ってきた。

一方、日本は米国だけを見てしまっていて「米国が国内に入ってきたらどうしよう。米国の陰謀だ」という話さえ出てくる。米国はアジアのマーケットをにらんで入ってきた。日本もアジアのマーケットをにらんだうえでTPPに参加するのかどうかを考えなければいけないのだと思います。

戦略性という面ではどうしても米国に負けてしまう面があり、今回も「米国にやられてしまうのではないか」という思いが広がっています。しかし、日本はアジアの一員。これから一番発展するアジアのマーケットで日本がどれだけのシェアを獲得できるのか。日本は戦略を考えなければいけません。

2013年6月現在 交渉参加は11カ国。

TPPは、2005年6月3日にシンガポール、ブルネイ、チリ、ニュージーランドの4か国間で調印し、2006年5月28日に発効した。

2013年現在、アメリカ、オーストラリア、マレーシア、ベトナム、ペルー、カナダ、メキシコ、が加わり拡大交渉中。

日本は4月末に交渉参加11カ国の同意をとりつけ、現在米国議会の承認待ち。7月のマレーシアで行われる会合から交渉参加予定。日本が加われば12カ国になる。

2013年内の最終妥結を目指している